



[平成 30 年 6 月 13 日 定例会発表要旨]

まちかどで拾う“歴史のカケラ”

手稲郷土史研究会 会員 菅原純子

西区で発見！旧手稲町の名残

私は就学前から 30 年余を現在の「札幌市西区西町」で過ごしました。昭和 42 年まで「札幌郡手稲町字東」および「札幌郡手稲町字宮の沢」と呼ばれていたところです。札幌市との合併から 50 年を経て、いまは西区となったその界隈で、旧手稲町の面影をたずねてみました。



まちを歩くと、私はよく“電柱”を見上げます。正式な住所としては残らなかった古い地名が銘板に刻まれていることがあるからです。地下鉄宮の沢駅周辺で、「手稲幹」をまず発見。この電柱名は、かつて札幌市との境界だった琴似発寒川のほとりまで広く確認できました。次に多かったのは「上手稲幹」。明治期の“大字三村時代”に遡るこの地名は、馴染みのあったバス停や町内会名などではすでに失われていますが、『上手稲神社』や『上手稲開村記念碑』（手稲記念館敷地内）で見ることができました。学校名のほかではほとんど消えてしまった“手稲東”を電柱で確かめられたのも収穫でした。西区の西端に位置することから“西町”と改称されたこの一帯が、手稲町時代にはまちの東端だったことが読み取れます。



旧手稲町にゆかりある電柱名

明治初期に上手稲へ集団移住した旧仙台白石藩の家臣一族についてはよく知られるところですが、そのひとり白井正路しらいまさみちが開削した道路沿いで「正路幹」が散見できます。手稲の開拓草創期にゆかりある名前が電柱や市道に遺されているのが嬉しく、ご親族と私の祖父母が懇意にしていたことなども懐かしく思い出されました。

白石藩士三木勉みきつとむが私塾「時習館じしゅうかん」を開いたあたりは“手稲教育発祥の地”と言われ、記念碑が建てられています。その近くで見つけたのが「時習館」の名を冠した複数の集合住宅。これも“歴史のカケラ”と呼べそうです。私の母校は町立として最後に開校した手稲宮丘小学校ですが、建設時に校名を巡って議論があったことをおぼろげに憶えています。「由緒ある時習館小学校にすべきだ」、「そんな古くさい名前では子どもがかわいそう」と。近年、小学校の統廃合によって誕生した中央区の資生館しせいかん小学校が「札幌の教育史を語るうえで欠かせない名前。子どもたちは誇りを感じるだろうし新鮮味もある」と話題になりました。まさに隔世の感です。

電柱名から知る まちの歴史

電柱の銘板を手がかりにまちの歴史に触れるのは楽しいことです。かつてあった施設や企業の名残をとどめているものも多く、興味は尽きません。その時代の空気も、同時に伝わってくるようです。

たとえば手稲区で最も多いと思われるのは「鉱山幹」で、国道5号よりも山側の軽川流域から小樽市との境界まで広範囲で見られます。



手稲の三大勢力？

もちろん、手稲鉱山に因んだものでしょう。手稲のまちの発展や人々の暮らしに鉱山が深く関わっていたことを、電柱から改めて気づかされました。前田地区で目立っていたのは「農協幹」。昔は農業が盛んだった土地柄がうかがえます。富丘・西宮の沢地区の JR 沿線では「国鉄幹」を多数発見。この三種類の電柱名は区内で突出していて、まるで往時の勢力分布を見るようでした。



憶えていますか？ この名前

西区八軒の「試験場幹」は、北海道工業試験場に由来するのでしょうか。その第二庁舎は現在、喫茶店に再活用され、地域の産業史を昭和20年代築の建物から垣間見ることができました。西区発寒の「木工幹」周辺は商業施設やマンションが林立し、もはや工場群の面影を辿るのは容易ではありません。豊平川と精進川に接する豊平区中の島では「ふ化場幹」が確認できました。『サッポロビール園』（東区）の近くに残るのは「日本ビール幹」。戦後の数年間は、商品名も“ニッポンビール”だったそうです。このほか、白石区菊水では遊郭の残り香のような「大門幹」が見られました。

電柱名に“土地の記憶”を発見したときには、ついガッツポーズが出そうになります。ほんの一例ですが、中央区宮の森の「一二軒幹」は、西区の八軒や二十四軒と同じく 12 軒の入植からこの地が始まったことを物語っています。地下鉄南平岸駅周辺（豊平区）の「麻畑北幹」は、製網材料のアサを栽培していた明治期の麻畑村に遡る地名です。豊平区西岡の「油沢幹」は、タール状の油がこのあたりの地表に染み出ていることによるのだとか。また、南区川沿では明治期の山鼻村（のちの藻岩村）の字名に因む「八垂別南幹」を確認できました。JR 星置駅周辺の「山口幹」なども、手稲村の“大字三村時代”を偲ばすものといえるでしょう。



ココはどこ？

あれもこれも「♪昔の名前で出ています」

“歴史のカケラ”は、いたるところで発見できます。たとえば手稲区内の橋の名前を見ると、富丘地区の三樽別川に架かる「官舎橋」が昔ここに国鉄の職員住宅があったことを示していたり、中の川に架かる「追分橋」がのちの河川改修によって名前を変えられた追分川の忘れ形見だったり…。なかでも興味深いのは、西宮の沢地区を流れる現在の追分川（新発寒地区では旧中の川）に架かる「炭鉱 1 号橋」。この川はもともと「炭鉱排水」と呼ばれていたものですが、手稲に炭鉱とはどういうことでしょうか。大正初期の地図に、水路と思しき線がほぼ同じ位置に記されています。この線は新川に合流していることから、軟弱な泥炭地を改良するために開削された“大原野排水”の支流の一つだったと考えられます。そして当時、この原野を走る鉄道を経営していたのは、北海道炭礦汽船（創立時は北海道炭礦鐵道）。あくまで推測ですが、炭鉱排水の謂れは、鉄道会社と関係があるのかもしれませんが。



手稲に炭鉱とは…

ほかにも踏切、道路、公園、人道橋、バス停、三角点…etc. 歌の文句ではありませんが「♪昔の名前で出ています～」は、みな“土地の記憶”につながるお宝と言えるでしょう。

私の住む町内会は「富丘三樽別町内会」といいます。実はこれが地域の歴史に関心を持つきっかけとなりました。そもそも「三樽別」とは昭和17年まで使われていた「富丘」の古称。松浦武二郎の地図にも描かれるアイヌ語の「サンタラック」（縄でシカを縛り荷おろしするところの意）からの転訛と伝わります。古くより交通の要所とされ、明治4年には「サンタロペツ通行屋」が置かれました。遺構などは残念ながらありませんが、川や公園、町内会の名前として立派に(?)残っています。

「歩く・知る・楽しむ」をキーワードに、皆さんも“歴史のカケラ”を探しに出かけませんか。

次回予定 ⇒ 「お口は命の入口、心の出口」 菱輪隆宏氏（木の実歯科 院長）／8月8日（水）18:15～／区民センター会議室

● 歴史随想 『大樹は見ていた』①

手稲鉾山こうさい鉾滓池 のり面の大樹

手稲郷土史研究会 会員 村元健治

歴史を語る証人は、もちろん人だ。しかし、その人も年をとって記憶が薄れ、最期には知っていたことも全て忘却の彼方に消える。同じように施設、建物も、いずれ倒壊し、消滅してしまう。その点、樹木は違う。中には何百年も生きるものもある。歴史こそ語りはしないものの、歴史そのものをじっと眺めていることはできる。その意味で、何十年はもちろん、何百年を超えるような大樹（老木）こそ、ある意味では“無言に歴史を語る生きた証人”とも言えよう。

かかる観点から、手稲の歴史を 間近で見えてきた 3 本の大樹を紹介していくことにしたい。

第 1 回目は、手稲鉾山に関する大樹のことについて紹介する。

JR 稲穂駅の北側にある 手稲軽工業団地の南側縁に 高さ 15m、胸高 1~1.5mほどの太さの大樹がある。2004（平成 13）年の台風 18 号の猛烈な大風により、10 本ほど倒れてしまったが、それでもまだ 20 本ぐらいいは残っている。

写真の樹は、それらの樹々を撮影したものだ。若い木に交じって巨木と言ってよいような樹々かのり面に、点々と立っていて、なかなか壮観だ。

樹種は改良ポプラかドロノキのようだが、表皮が節くれだって象皮のようにひび割れて、風格を醸し出している。多分、植林されてから 50~70 年程は経過しているものと思われる。

この大樹が立っている所は、実はかつて三菱鉾業が手稲鉾山を経営しだした時に造成したこうさい鉾滓（カス）を貯めて置く池の のり面だった所だ。その高さは 3mほどもあるが、その斜面にのり面崩壊防止（土留め）と風害防止のために これらの樹々が植栽されたものと思われる。のり面の高さを見るといかにも、かつてここに池があったことを 彷彿とさせる。

三菱は、選鉾場で捨てられる鉾滓を 国道 5 号線、函館本線を越えて当地まで パイプに入れて流し込んでいたが、そうした池はこの他に、星置運動公園と札幌運転免許試験場の所にもあった。

もし これら大樹の樹齢が上記したような年齢なら、最初に鉾滓池ができた頃のこととはともかくも、一中（道立札幌南高）生徒たちによる のり面の嵩上げ作業を始め、鉾山閉山後の池の活用として一時行われた、札幌市のし尿処理の投棄、並びに鉾山からの鉾毒排水に伴う出水騒ぎなどを これらの大樹は見てきたに違いない。



旧鉾滓池 のり面の大樹

*会員の皆様…郷土史に関する研究文や随筆などをお寄せください。執筆いただける方は 定例会でお知らせ願います。

まめ知識

「北海道遺産」とは…

【北海道遺産】とは、次代に継承したい“北海道の宝物”を探し、守り育てて活用しようと 1997 年にスタートした『北海道遺産構想』に基づく事業で、2001 年に 25 件、2004 年に 27 件、計 52 件の“モノ”や“コト”がこれまで選定されています。遺産＝過去ではなく 地域の未来を創造しゆく資産ととらえ、市民が活動の担い手であることが 大きな特徴です。

本年、「シェアリング・ヘリテージ」をテーマに 三回目となる募集が行われ、新たな【北海道遺産】が 8 月に決定します。詳細は、NPO 法人北海道遺産協議会の HP などをご覧ください。

■■■分科会だより

新川に新しい風を

昨年は「札幌市・手稲町合併 50 周年」という記念の年でした。そして来年は「手稲区区制 30 周年」を迎えます。昭和 41 年当時の旧手稲町（現手稲区＋西区の一部）の人口は約 3 万人、現在の手稲区の人口は約 14 万人。じつに現区民の 80% が、合併後に手稲に住んだこととなります。駅から国道 5 号線を核に形成された街は 住宅地を中心に大きく広がり、賑わいの様相も変貌しました。

さらに今年には「北海道命名 150 年」、「新川開削 130 年」です。

手稲郷土史研究会 新川運河部会では、さまざまな節目を刻むこの機会に、道都札幌の街づくりに大きな役割を果たしてきた「新川」の『北海道遺産』選定をめざそうと、関係諸団体と連携し、「新川ルネサンス」という遺産名（モノ・コト・ストーリーを表す登録名称）で、3 月末に北海道遺産協議会事務局へ 申請書を提出しました。登録の決定は、8 月に予定されています。

また、登録申請に向けての活動自体が「北海道命名 150 年」に伴う『北海道みらい事業』に認定され、今年度は、①新川フットパス&川下り（7 月 7 日、9 月 8 日）、②新川開削 130 年記念フォーラム（11 月 3 日）、③記念誌「新川ルネサンス」の発行（12 月下旬）という 三つの事業を実施することとなりました。当分科会が牽引役となり、新川の歴史や魅力を大いにアピールしていきたいと考えています。

「新川ルネサンス」に関わる事業は、温故知新、つまり「あたらしい新川」の可能性を見出すことが目的です。手稲のこれからの街づくりを考えると、新川やその河川敷地、新川通りなどを視野に入れることも必要となってくるでしょう。子供たちも参加することにより、“山と川と海”が連動した 楽しい街づくりのアイデアが生まれてくるのではないかと、期待しています。

なお、新川の広域性は 複数の行政機関等が関係するため、それらに対応する窓口として、このたび『新川流域を楽しくする会』が発足し、当分科会がその事務局となりました。新川河口一帯が 誰もが安全で安心して利用できる海辺となるよう、将来は海浜公園化などにも取り組んでいけたらと思います。



昔の新川と手稲山（石狩・手稲通り）

渡部 孝次（手稲郷土史研究会 新川運河部会 代表）



★資料部からのお知らせ 手稲郷土史研究会が所蔵している図書や資料を 会員が利用しやすいようにするため、現在、目録を作成しています。また、検索の利便向上を図るために、図書の背表紙に記号番号を貼り付けることも併せて計画しました。今回対象としたのは、かつて西尾貞敏氏から本会に寄贈された図書で、会員間で通称『西尾文庫』と呼ばれてきたものです。226 冊の貴重な図書が確認され、以下のように分類整理して取り纏めました。

- 分類 A 歴史（日本・外国）48 冊 ■ 分類 B 民俗（民謡・歌謡・映画史・その他）28 冊
- 分類 C 自然（鉱山・鉱物・植物・地域・火山・自然探訪）91 冊
- 分類 D 文学（小説・文学史）35 冊 ■ 分類 E その他（評論他）24 冊

当会が所蔵する図書や資料は この他にも未整理のものが多数あり、順次、取り組む予定です。ラベル貼りを含めた作業がある程度終了した段階で、会員の皆さんには改めてご紹介します。

なお、図書の利用にあたっては、保管管理を 当会の茂内顧問宅に依頼しているものであるため、予め利用日時についての調整が必要となります。準備が整いましたら、『図書目録』並びに『取扱要領』を会員の皆さんへ配付する予定です。

山本 博（手稲郷土史研究会 資料部長）